

黒石の恥

10月中旬、青森県黒石市の祭りの写真展覧会で「市長賞」を受けた写真の被写体が、「いじめを苦にして、この数日後に電車で飛び込んで轢死したことがわかった。すると、「(死者が被写体の写真は) こういう会の市長賞にふさわしくない」と賞の取り消しになった。……被写体が撮影されたのは、生前のことである(当然ですが)。亡くなった方が写っているのは具合が悪いなど、聞いたこともないし、なによりなぜ「ふさわしくない」のかわからない。それを知った亡くなった娘さんの父親が、「いじめでなくなったことが原因らしい」と遺書とともに公表しとことから、そのいきさつがわかった。早朝の読売TVの解説で、「おとうさんは怒っているのではない」などと頓珍漢な話を辛坊治郎がしていた。バカモノ！ おとうさんの、賞取り消しに対してもいじめに対しても、跳びあがって怒鳴りつけたい気持ちがわからないのか！

おとうさんは、おとなしい、品のある穏やかな方である。粗い言葉をださなくても無念の思いが籠っている。訥々と語る語り口が痛々しい。

自殺した彼女にしてみれば、この写真は仲のいい友人たちとの大好きな、楽しい踊りの真っ最中である。そして、登校途中で、これからの、卑怯な衆をたのんでのいじめやいやがらせを考えると、前途を悲観したのかもしれない。

さすがに世間は怒った。黒石市役所に数千通の抗議電話やメールが殺到し、業務に差し支えるほどになる。すると、市長賞が復活したのである。市長賞の基準はなんなのか？市長は家族に謝罪に行った。それはいいが、選考委員会の名前も公表してくれないか。わずか数千の抗議で自分たちが自信をもって決定したことを翻すような腰がすわらず、オロオロしているような恥ずべき連中である。もともと、いじめを隠蔽しようとした連中である。

大津市のいじめ隠しで、大津市長が非難の矛先になったことを忘れている。

この楽しそうな彼女の生前の姿をみて、いじめた側の人間が痛みを覚える、あるいは悔悟の念に苛まれるなどと考えたのではないか。こいつらにそんな「いじめ」で他人が死んだことに対して、罪悪感や後悔の念が発生するとは思えない。

本気になって考えをあらためないと、次々と被害者がでるし、黒石市は日本中から相手にされなくなる。